

2021年10月10日 聖霊降臨節第21主日礼拝メッセージ

「隣人を自分のように大切にする」

牛田匡牧師

聖書 ローマの信徒への手紙 13章 1-10節

昨日は暑いくらいの、とてもよい天候に恵まれた中、各地の保育園では運動会が行われたようです。参観に来られる家族の人数制限をしたり、プログラムを短縮したり、という制約はあったものの、それでもこの気持ちの良い秋空の下、子どもたちが喜んで体を動かすことができたのは、子どもたちにとっても、ご家族にとっても、とても思い出に残った一日になったのではないかと思います。

子どもたちが一生懸命に、体操や演技に取り組んでいる姿を見ていると、何だか見ているこちらまで温かい気持ちになって来ます。それは、練習して来たことを間違えずに出来たかどうか、競争で勝てたかどうか、ということではなく、神様から与えられている「いのち」を、子どもたちがそれぞれに活かし、動かして、体いっぱい表現しているからなのではないでしょうか。自分に体が与えられていて、いのちが与えられているということ、そのこと自体を喜んでいる。隣となりの人と比べて自分を卑下したり、卑屈になったりしていない。自分が体を動かすことを通して、喜んでくれる人たちがいることを知っている……。だからこそ、そのような子どもたちの姿は、見ている人たちに感動を与えるのかもしれない。

「いのち」そのものとして、裸で生まれて来た私たちですが、日々に生きていく中で、様々なものを身につけたり、周りからしつけられたり、学んだりして来て、今があります。果たして、今の私たちは本来の「いのち」そのもの、自分自身を生きているのでしょうか。たくさんの衣服で着飾ることを通して、また様々な立場に就くことを通して、本来の自分自身が見えなくなってしまうたり、息苦しくなったりしていることはないでしょうか。

イギリスの詩人ウィリアム・ワーズワースの「虹」(1802)という詩の一節には「子どもは大人の父」という言葉があります。私自身もついつい、子どもに対して教えることはばかりに気が向いてしまいましたが、実は大人の方が子どもから学ばないとい

けない。大人の都合に合わせて子どもをしつけるのではなく、この狂った社会に合うように仕付けられてしまった大人の方こそ、子どもたちから学び、様々な折り目や仕付け系から解放されて、いのち本来の一枚の生地へと、再び伸ばされる必要があるのではないかと思います。

さて、今回の聖書の言葉は、とても難解と言いますか、読んでいても厄介な言葉でした。冒頭の 1 節から「人は皆、上に立つ権力に従うべきです。神によらない権力はなく、今ある権力はすべて神によって立てられたものだからです」とありますが、すぐに「そんなはずはない」と反論したくなります。折しも先週には、岸田さんが新しく第 100 代目の内閣総理大臣に就任し、新しい内閣が発足しました。発表されたその顔ぶれを見ていると、スキャンダルだらけで、早速様々なメディアから酷評されているようです。いわゆる「お友だち人事」と言いますか、自分たちの派閥の都合や、利権のための人選であって、コロナによって世界経済全体が大打撃を受けているこの時代に、きちんと向き合おうとする姿勢は見られません。原子力・核政策についても、反対派の人々は閣外に追いやられてしまいました。

そんな現実を前にして、それでもなお「今ある権力はすべて神によって立てられたものだから、人は皆、上に立つ権力に従うべきだ」と、聖書は言うのでしょうか。釜ヶ崎の本田哲郎神父は、そのような読み方は、明らかな誤訳・翻訳ミスであり、ローマ帝国の国教となって国家権力と結びついた教会組織を権威付けるための読み方であって、本来は違ったはずだと言い、自分で翻訳されています。

まず 1 節の「神によらない権力はなく」ですが、「～による、～によって」という単語をもう一つの意味である「～の下に」と理解すると、「神の下にない権力はない」と訳すことができます。そして「今ある権力」と訳される「その権威」は「神の下にあるもの」、「神によって立てられた（命じられた）」という受動態は、「命じることができる」と自動詞で理解します。すると、「人は皆、権威には従うべきです。実に、神の下にあるのでなければ、それは権威ではありません。神の下にあってこそ（権威として）命令を出せるからです」となります。

こちらの方がずっと理解しやすく、腑に落ちるのではないのでしょうか。時に人の命を軽んじ、踏みにじることもあるような、今ある全ての権威・権力が神からのもののはずがありません。大切なのは、それが神の下にあるかどうか。神の下にある権威・権力でなければ、それは本物ではないということです。この世界にはたくさんの権威や権力が、いくつも重なり合って、絡み合っています。だからこそ全てに従うのでもなく、本当に従うべき権威が何かを見極めることが必要になって来ます。その際の見極めの基準、それが「神の下にあるか」どうか、つまり神の意志を行っているかどうか、ということです。

聖書に示されている神は、神の言葉であるイエス・キリストの姿に表わされている通り「小さくされた者の側に立つ神」であり、低みから共に立ち、働かれる神です。そしてそのような神の下にあり、神の意志を行う本当の権威者・権力者とは、そのような神と同じ価値観を持ち、苦しむ人の痛みを共感・共有する視座から、物事を判断して行動する人のはずです。そのことを考えると、4 節の「権力は、あなたに善を行わせるために、神に仕える者なのです」という言葉の理解も変わって来ます。これは直訳すると「権威者は、神に仕える者であり、あなたに善を行わせる」ですが、その意味する所は「神に仕える者こそ本当の権威者であり、あなたに善を行わせる(ように促す)」ということなのだと言えます。

5 節「怒りが恐ろしいからだけではなく、良心のためにも、これに従うべきです」も、この訳では「形だけ従うのではなく、心底、心から信頼して従うべきだ」と読めてしまっていますが、この「良心のためには」、直訳すると「良識の故に」であり、むしろ「自覚を持って」と理解できます。つまり本当の権威か、見せかけの権威かをきちんと判断して見極めて、自覚を持って従いなさい、ということなのだと言えます。

そして 6 節以降は、神に仕える本当の権威・権力者に対して、自覚を持って納得した上での義務、税金という話になっていますが、8 節からは行うべきこととして、律法、戒めいましの話題に移っています。9 節には「姦淫するな、殺すな、盗むな、貪るな」とありますが、これはユダヤ人たちが最も重要な掟、戒めとしていた「十戒」の一部です。その他にも細かい律法が、何十、何百とあったそうですが、この手紙を書いたパウロは「その他どんな戒めがあっても、『隣人を自分のように愛しなさい』

という言葉に要約されます。愛は隣人に悪を行いません。だから、愛は律法を全うするのです」と断言しています。これだけで十分というわけです。

「愛」という言葉は、現代の日本語では親子や恋人などの極一部の特定の関係でしか使いませんし、離婚や虐待や、DVがある中で、「愛」が語られると、ますます分からなくなってしまうのではないかと思います。ですので、聖書に記されている「アガペー」という言葉は、「愛する」と訳すよりもむしろ「大切にする」と訳す方が、分かりやすいかと思います。「隣人を自分のように大切にする」……。たとえ苦手な相手、好きになれない相手であっても、尊重したい。自分が大切にされたいと思うように、相手のことも大切にする。自分がしてもらいたいと思うことを、人にもしてあげる(マタイ 7:12)。言葉にすると単純なことですが、その単純なことができるようでありたいと思います。

しかし、現実を見てみると、その単純なことができていない自分自身があります。周りの人を大切にしたい、人に優しくしたいと思っているのに、できなかつたり、自分のことも大切にできないで、自暴自棄になってしまったりすることもあります。過去の傷から目を背けるために傷を隠したり、覆ったり、様々なものを身につけ、着飾ったりしています。今を生きている私は、果たして本当の自分自身を生きているだろうか。私が生きている自分と思っているのは、実は「立場」に過ぎないのではないか。私が日々は無意識的にか、意識的にか従っている権威は、本当に神の下にある本物の権威なのか。実は見せかけの権威なのではないか。

私たちにはできることは限られています。時間も力も無限ではありません。政治的な発言や行動もできないかもしれません。むしろできていないこと、失敗したことはばかりかもしれません。かつて失ってしまった大切なものも、たくさんあります……。とはいえ、それでも今日も私たちは、最も身近な所で、自分自身とその隣にいる人たちを大切にする歩みへと、呼ばれ、招かれています。「大丈夫、私はあなたと一緒にいる」……。全ての命を祝福し、力を与えられる神様と共にあって、私たちはその歩みへとここから導かれて行きます。